

令和元年度

戸沢村の館(たて)について



館（「やかた」とも呼ぶ）とは、平安時代には国司や郡司の邸宅を指したが、中世以降、地方豪族の武士化によって砦など軍備を伴った居所を意味するようになった。戦国時代から安土桃山時代に大名によって改修され、近世の城郭になったものが多かったが、江戸時代の”一国一城令”により、館は城に含まれないものになった（ブリタニカ国際大百科事典）。

このため、戸沢（新庄）藩の中核として、また藩主の居城として新庄城（沼田城とも呼ばれる。）が築かれると、前述の一国一城令もあって藩内各地にあった館は廃止されていったのではないか、と考えられる。

戸沢村には、空堀跡などの遺構と思しきものがある館だけでなく、言い伝え上と思われるものも含めて、相当数があったとされているが、植林や自然崩壊などにより、館跡を外観的に捉えることは難しい。

そのような現況にあって、野口のゲンジ館は、地域の意気込みもあって往時の面影を留めているように思え、貴重なものとなっている。



館跡個別表 説明

1.出典物

- | | |
|--|------------------------|
| (1)中世城館遺跡調査票（山形県） | ※個別表の基礎となっています。 |
| (2)山形県最上地方の城と櫓（最上氏・大宝寺氏・小野寺氏境目争乱地の縄張調査報告書） | ※同表に使用しているほか、参考にしています。 |
| (3)地歴（第10号。山形県立新庄北高等学校地歴部発行） | ※同 上 |
| (4)戸沢村史 | ※本表の参考にしています。 |

2.「館」と「櫓」について

どちらも特段の違いはなく、『中世城館遺跡調査票』『戸沢村史』では“館”を、『山形県最上地方の城と櫓』『地歴』においては“櫓”を使っているが、基本的に中世遺跡調査票に記載されているものを取り上げているので、ここでは御殿野跡（項番26）及び八幡櫓跡（項番27）を除き館での名称としている。なお、八幡櫓は中世城館遺跡調査票では取り上げられていない。

3.俯瞰図について

本来的な目的として、ドローンにより館跡（構造物が置かれていたであろう土地の形状。縄張）全景を収録したかったが、ゲンジ館跡（項番1）を除き、植林、開墾、自然崩壊及び荒廃により、その形状を留めているものがなかったので、“多分、館があった時に見られたであろう風景”に置き換えて撮影している。

4.大館跡（項番8）、サ館跡（項番9）並びに梨の木館跡（項番10）について

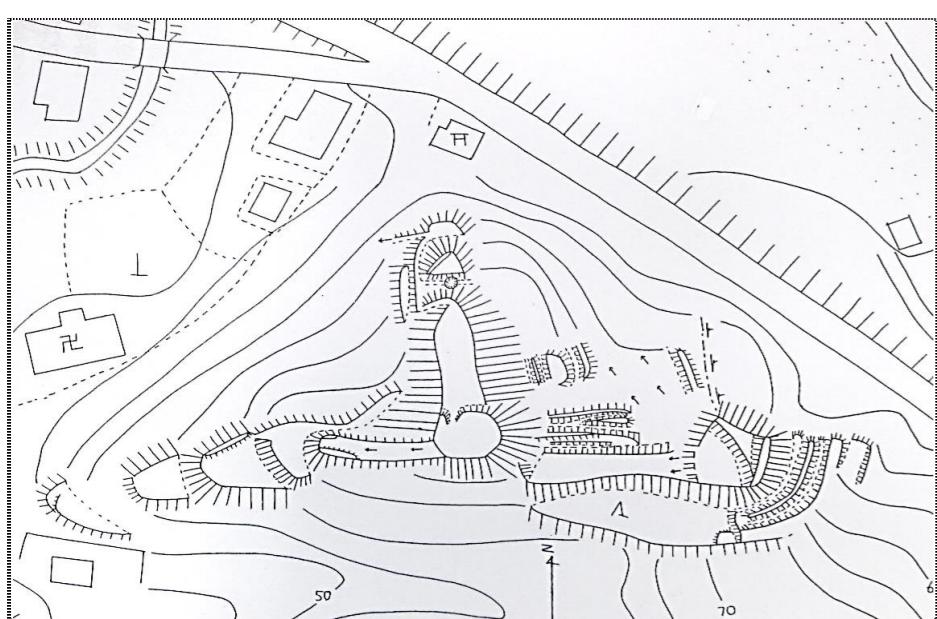
この3館については近接しており、調査票上の境目を読み解くことが出来なかったので、俯瞰図が違っている（又は紛れ込んでいる）可能性があります。

5.その他

個別表中の縄張図は、出典物（戸沢村史を除く）から転載しているが、八幡櫓については見つからなかったため空欄となっている。

戸沢村の館（楯）跡　—中世の城館遺跡—

NO	15	名 称	薬師館	所在地	蔵岡
----	----	-----	-----	-----	----



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（空堀・枡形・井戸）	不良	社寺有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	上部平坦地には三吉山の小碑があり整地されているが、北西及び南東部は崖崩れのため荒れてい	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無			

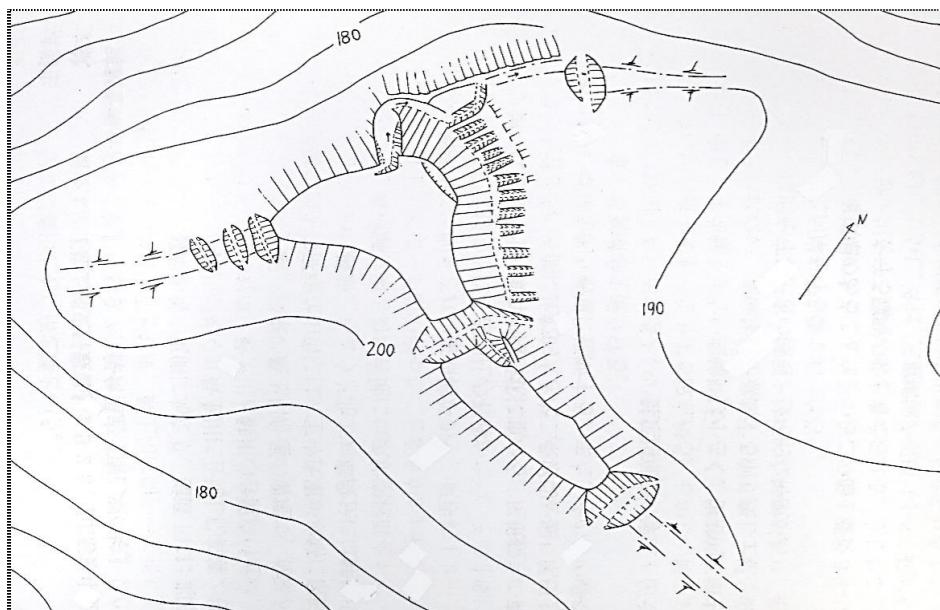
館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城・詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	館主は、信太（篠田）市之進で鮭延秀綱の家臣とされているが、大善院にある市之進の位牌と伝えられるものは、市之進は田之沢楯主とある。 本丸跡と見られる所は、10m×11mと狭く、明治12年（1820）に大きな崖崩れがあった等の記録から、それ以前にも数度の崖崩れがあったことも予想され、築城当時の規模など想像できない。	東に八向山・本合海、西に真柄・古口、北に津谷・岩清水・松坂と遠望でき、眼下に最上川と鮭川の合流点があることから、水陸交通の要所である。		

その他の文献等	<p>最上川と鮭川合流点のちょうど対岸、最上川に向かって張り出す低い丘陵突端に立地するが、蔵岡集落の東側に当たり、楯真下には薬師神社があり、楯下を外堀状に小河川が巡り最上川に合流し、防御線の役割を果たしたものと考えられる。この合流点付近は「佐芸（さけ）駅」以来の最上川舟運の要地で、楯跡が分布している。すなわち、楯跡西方の高峻な山頂には大宝寺氏軍が攻略し、名城とある田沢（たのさわ）楯跡、ちょうど北方対岸段丘には鮭延氏が初めて入部したという岩鼻楯跡、東方対岸台地には畝状空堀群を持つドーアン楯跡があり、最上川の領主が競い合ったことが伺われる。</p> <p>薬師楯跡の最高所には掘平された主曲輪があり、東西約12m、南北約14mと小さく、大スギの三吉神社の石碑が建つが、その北側に細長い曲輪、西側には5つの小曲輪群が階段状に重なる。尾根続きの東側先端は削り土墨と、その外側には比較的大きな二条堀切を掘り尾根を切断し、主曲輪には鋭い切岸を削り厳重に遮断する。また、その下の緩やかな傾斜の沢には三重の多重横堀を掘り守る。</p> <p>楯主は、信太（篠田とも）市之進と言い鮭延越前守の家臣と伝えるが、この人物は田沢楯主であったとする説も残る。しかし、楯の全体構造は防御性に徹し、主曲輪と少ない曲輪群は小さく、恒常に領主が居住した城とは考えられない。東側尾根を遮断する削り残し土墨と鋭い二条の堀切、さらには沢を守る三重の横堀と技術的な特徴があり、最上川舟運の要衝に置かれた河岸を守る砦であったろう。</p> <p>かつては三重横堀のあることなどから、この楯を慶長5年の出羽合戦時に造られた最上川を守る臨時の砦と考えていたが、三重横堀の規模は小さく範囲も狭く、二条堀切も特に隔絶した規模でないことから、伝えされるように信太氏クラスの武将が何らかの危機に際して、最上川の河岸を守るために構築した臨時の楯ではないだろうかと考える。</p> <p style="text-align: right;">（山形県最上地方の城と楯 平成28年5月より）</p>
	<p style="text-align: right;">（山形県最上地方の城と楯 平成28年5月より）</p>

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成2年5月10日）	2019(令和1)年7月24日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	(記載無し)	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土墨・空堀）	やや良	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	不詳 一部壊（地すべり）	無
遺物/所有（保持）者の有無	無			

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	矢口讚岐	戦国時代	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	江戸時代
	主要居城者/軍事的機能	清水家滅亡（1614年）とともに廃城 矢口讚岐は清水大蔵大輔分限帳に「25600刈」とあり、家臣中第2の持高で「家老」とも記されている。 一説には、佐々木典膳が岩鼻館に居住する前に築いた館とも言われている。		最上川を眼下にし、角川村に至る道路を西側、南に八向館、薬師館を遠望でき、東は岩清水、松坂、鮭川を一望できる軍事的に要害といえる。	

その他の文献等	天正9年（1581）頃、大宝寺義氏家臣 七森雅楽助は「鮭延の内、田之沢とよぶ地、清水・仙北・小国方々へ通隔致し候。雜々調法に及ばれ候とも、名城に候間まかりならず候処に今月朔日引立てられ、多人数時刻なく攻つぶされ候」と山辺氏に田之沢の城攻略を報告した（「山辺殿宛 七森雅楽助氏信書状写」山形曾根家文書）。この名城とは、蔵岡の田沢（たのさわ）楯跡と考えられる。 田沢楯跡は、鮭川の最上川合流点を見下ろす対岸に、どっしりと建つ蔵岡山に立地する。上流を少し上がると清水城となり、鮭川を上ると鮭延城になり、さらに行き山を越えると仙北に至る。また、鮭川から舟形川を東に上ると新城に至り、東は小国に接する。すなわち、ここは山形曾根家文書にあるように清水、仙北、小国に通じる要衝の地であった。 平地から高さ約160mと山形では数少ない高い山頂に、平坦な二つの曲輪がある。そのうち主曲輪は約26mと小規模で、北西側に掘り込み式の舟形状虎口が開く。脇には虎口を守る12条の畝状空堀が掘られ、その先は堀切で尾根を切断する。西側は3条堀切で尾根を切断し、東南側は堀切外に細長い曲輪を造り尾根を堀切で切断する。この田沢楯は高峻な要害立地、舟形状虎口の存在、そして畝状空堀と多条堀切を含む三方の尾根を切断する堀の使用に特徴があると言えよう。 かつて舟形状虎口、畝状空堀、多条堀切は、山形の戦争用城の発達した技術と見て、「羽源記」に慶長出羽合戦時に田沢楯のある蔵岡に、最上方は防衛拠点を置いたとあることから、田沢楯は戦国期の楯を慶長5年に改修強化したのだろう、と考えたことがあった（『南出羽の城』）が、畝状堀切と多条堀切を戦国期の庄内大宝寺系城館に確認し、田沢楯跡の遺構は戦国期と見ても良いと思われる。
	七森雅楽助氏信書写に田沢楯を落とした後、「其外地下の者共相籠り候地、4、5ヶ所押し払われ候条、清水口への事、もっての他難儀の由申しなし候間、則時に新城・古口へ陣とらるるべく御手配仰せつけられ候」と4、5ヶ所の地侍の楯を押さえ、新庄・古口へ向かったとあり、攻略楯とはどこか興味が持たれる。また、古口は支配下になく、進入ルートは飽海から山越えで鮭延に入ったことが判明する。この時期、鮭延は庄内支配下で（「鮭延越前守聞書」）、鮭延が進攻拠点と考えられる。

(山形県最上地方の城と楯 平成28年5月より)

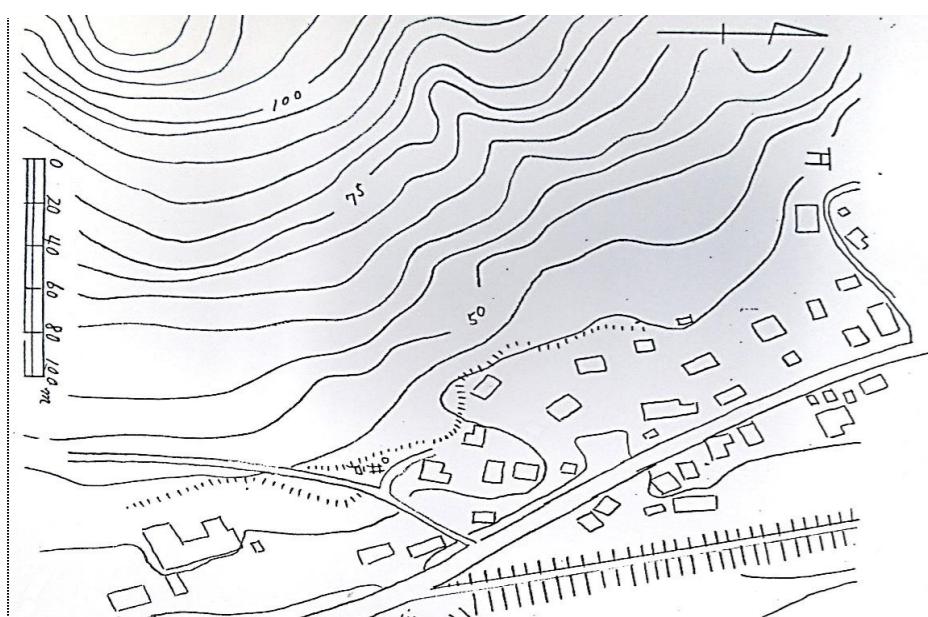
出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成3年4月26日）	2019(令和1)年7月18日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（櫛）跡 **—中世の城館遺跡—**

NO	17	名 称	真柄館	所在地	真柄
----	----	-----	-----	-----	----



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	平地	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（井戸）	消滅	個人有地	畠・宅地
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	不詳 全壊（地すべり）	無
遺物/所有（保持）者の有無	無			

館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	真柄十郎左衛門	戦国時代	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	江戸時代
	主要居城者/軍事的機能	豊臣氏滅亡後、遁れて此の地に来た十郎左衛門が隠れた館で、江戸時代末期まで続いていた。		最上川を眼下にし、軍事的に重要な場所と思う。	

その他の文献等	真柄集落の権兵衛山の麓に位置し、館主は真柄十郎左衛門という人であったという。館の近くに清水があり、この付近から瀬戸物の破片が出土することもあるという。 (戸沢村史)		
---------	---	--	--

出典 / 撮影年月日

山形県中世城館遺跡調査票（平成2年5月10日）

2019(令和1)年7月23日

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（櫛）跡 ー中世の城館遺跡ー

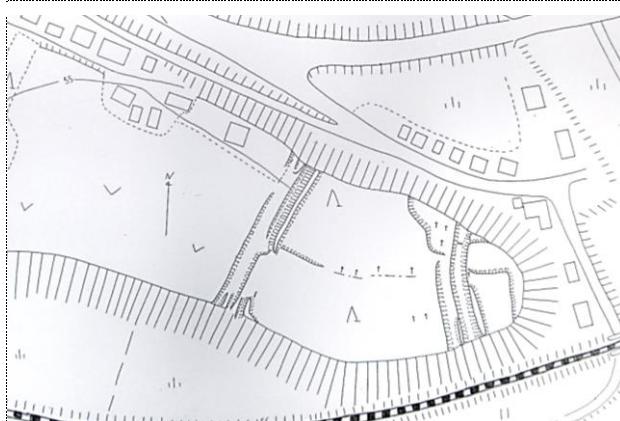
NO	18	名 称	古口館	所在地	上台
----	----	-----	-----	-----	----



別称 / 占地 / 種別 / 形状	上台館	段丘	館城	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（空堀）	やや良	国及び個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	道路工事等で一部破壊されているが、現存する部分は良好である。	無	大正10年頃一部壊（鉄道・県道工事）	無
遺物/所有(保持)者の有無	有（武器・古銭）			不明

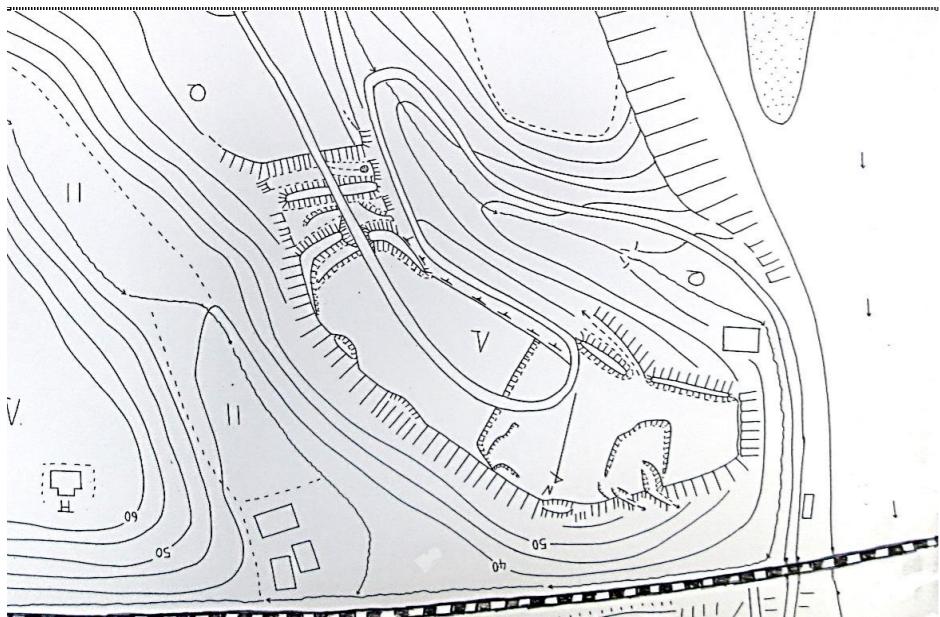


館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台 <small>記載無し</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	築・廢城の時期は定かでないが、秋保飛騨守の居館とされている。また、最上義光書状にある「古口殿」も飛騨守とされている。 なお、館跡から刀剣類、古銭、石器が発見され、陸羽西線工事の時、館麓から人骨が掘り出されたと伝えられている。	最上川や板敷山を越えて侵攻する庄内勢に対する備えとして重要な地点である。		



その他の文献等	<p>比高は約2.2mで、古口集落西方、角川が北から最上川に合流する西側、細長い段丘突端に立地する。対岸大地には堂坂櫛がある。ここは最上川と角川の合流点で後背地の深い角川河口の物流ネットワークの結節点で、「古口」の名が示すように最上川舟運の要地であった。さらに庄内との陸路「板敷越え」の内陸側入口で、板敷越えは（出羽）三山参りの道でもあったとされる。</p> <p>櫛は上台と呼ぶ大地を大規模に堀切で切断し、内側に土塁を置き、さらに奥の突端部を二条堀切で切断し、土塁を置き、主曲輪とする。最奥の主曲輪は東西約2.2m、南北約5.1mの規模で、低い段で二つに区画される。南・東・北側は、急崖となり、遮断線の空堀は箱堀で土橋はなく木橋があったのだろう。この南東端には矢竹が群生している。西の曲輪は広大で、大地を遮断する空堀は段丘突端で三条の堅堀となり落ちる。空堀内側には上面に2mほどの平坦面をもつ堂々たる土塁が北半分に原型を留め、南側は南端に一部が残る。</p> <p>古口櫛は大地突端を墨塗で遮断した複郭の単純な構造で、西の曲輪には虎口があり、内部には屋敷割があったと推測される。</p> <p>この櫛の本拠の村は、櫛下の北麓に本町（もとじゆく）の地名が残り北麓と考えられる。なお、「最上郡資料叢書」によると、櫛跡からかつて古銭が出土し、鉄道工事では櫛麓から人骨が掘出されたことがあった。</p> <p>櫛主は本姓秋保氏という国人古口氏で、戦国期資料に残る。曾根家文書の「山辺殿宛て七森雅楽助氏信書状写」によると、天正9（1581）年頃、庄内の大宝寺義氏軍が田之沢城（現在の田沢櫛跡）攻略の後、向かったのは新城古口であった。したがって、大宝寺氏の進攻は古口ではなく、飽海から鮭延へのルートであった。同じ曾根家文書「山形へ人々御中宛て清水義高書状写」には「古口兄弟、かの要害堅固安全の至」と書かれ、古口兄弟のいる古口要害は堅固安全であったとある。また『大泉叢誌』所収の「古口殿宛て義光書状写」によると、古口氏の仲介によって前森氏から自害した大宝寺義氏所持の刀が義光に届けられており、古口氏は庄内と最上の両勢力と関係のあったことが伺える。</p> <p>古口氏は最上川川湊の上に櫛を構え、櫛下には庄内への道が通る川と道を押さえる領主として、大勢力をもつたのである。</p> <p>（山形県最上地方の城と櫛（平成28年5月）より）</p>
---------	--

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成2年4月25日）	2019(令和1)年7月9日
------------	-------------------------	----------------



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（空堀）	不良	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	昭和40年頃一部壊 (開畠取付道路)	無
遺物/所有(保持)者の有無	(記載無し)			(記載無し)

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	秋保飛騨守の館跡で、史料によれば古口館と地続きとされている。			古口館と同様、内陸と庄内の接点で水陸交通の要である。

その他の文献等	<p>比高は約30mで、古口楯跡対岸、角川に張り出す丘陵突端に立地し、古口集落の背後となる。『山形県中世城館遺跡調査報告書』には「楯山」として報告されているが、楯山は楯の一般的な呼称であり、『南出羽の城』に『最上郡史料叢書』にある堂坂（楯山）から「堂坂楯跡」と報告されている。なお、『戸沢村史（昭和40年刊）』には「楯の山」と呼び「火葬場附近で昔は古口楯続きであった。この楯は庄内に通じる板敷山や乙夜峰に対して作られたものと思われる」とある。楯跡には蔵岡に通じる民有林林道が曲輪内を通り、土塁が切断されるなど一部壊されている。楯は、台地が狭くなる地点を二条の空堀と土塁で台地続きを遮断する。土塁は高さ約3mと大規模で内側に屈曲し、外側の空堀底には清水が湧き今も利用されている。楯内部は東西約140m、南北約45mの規模で、中ほどを南北に低い段で区画し、西端は急崖となり角川に落ちる。北側縁辺にある稻荷神社の背後には幅約7mの堀込み式虎口があり、北方面への道が下る。この虎口の外側はさらに低い段によって枠形状に区画される。主曲輪南側は傾斜が緩い斜面なため、全面に高さ約1mの土塁が遮断し、間に単純な虎口が開き下に道を下る。</p> <p>この楯について、『最上郡史料叢書』は古口楯の説明で、かつて角川は古口楯の南端から西に流れ、最上川と合流し、堂坂（楯山）は古口楯と地続きその付け根（今の川のところ）を塹壕にて遮断した、と書く。また、『戸沢村史』も時の城主がこれを加工して現在の流れにしたもので、古口裏の俗称「楯の山」と切り離してしまった形となつた、と古口楯と堂坂楯は地続きであったとしている。しかし、『山形県中世城館遺跡調査報告書』で、戸沢村担当松田富美雄氏は「角川の流れが変化したとしても、ここまで古口楯がのびるかどうか疑問である」とし、古口楯、堂坂楯二つの楯が単一楯の縄張りとして違和感がないことから、戦国期一つの楯とは考えられないのではないか、と思う。角川の流路変更が戦国期かは、今後とも課題である。</p> <p>この楯跡は、比較的大きな曲輪と二重の堀切と大規模な土塁、さらには曲輪縁辺の土塁と虎口、堀込み式の枠形状虎口があり、国人クラスの楯主が想定され、古口楯と一体となって機能した古口氏関連の楯か、と思われる。</p> <p style="text-align: right;">（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）</p>
---------	--

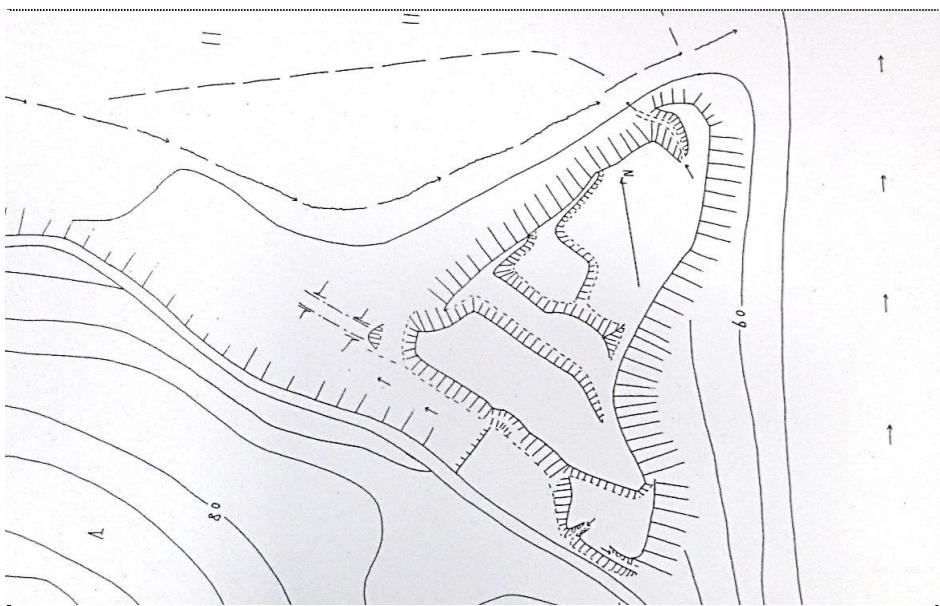
出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成3年4月20日）	2019(令和1)年7月23日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下せたんではなかろう



戸沢村の館（楯）跡 **—中世の城館遺跡—**

NO	20	名 称	權兵衛館	所在地	中 沢
----	----	-----	------	-----	-----



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山裾	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（空堀）	消滅	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	近年まで宅地や畠として使用されていて、館跡としての痕跡は角川川に突き出た舌状の台地などごく一部を残すのみである。	無	不詳 全壊（地すべり）	無
遺物/所有（保持）者の有無	無			

館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台	記載無し	不詳
	主要居城者/軍事的機能	ここには累代權兵衛なる館主がいたが、しばしば不祥事が起こったので館主の子孫は山の手に移ったとされている。		古口館と安倍館の中間にあり、いずれかの館の出城か双方の館の連絡所的性格が強い館と思われる。		

そ の 他 文 献 等	古口楯跡から角川を遡った中沢集落を過ぎた角川と中沢川合流点の東側、角川が蛇行する地点に張り出しす低丘陵突端にあり、現状はスギ林となる。この楯について『最上郡史料叢書』は、「楯の權兵衛というものが代々ここに住んでいたが、不祥事が続いたため山の手に移ったと伝える」と書いている。また『地歴』は、「以前楯山西側には、楯村があったという」との伝えを記録している。
	楯跡は両側が急峻となり、東側は角川に落ちる。また、西から東に小丘陵の内側に沢が入り込んでいる。構造は単純で三段の曲輪から成り、一番高い曲輪は南西に方形の曲輪が付属し、北西の小尾根は堀切で切断する。この下約4mの鋭い切岸下に第二の曲輪があり、さらに、その約5mの鋭い切岸下に第三の曲輪が角川に張り出す。第三の曲輪西北には、一段高い方形の区画がある。第三の曲輪が一番大きく東西最大長28m、南北最大長39mの規模となる。これらの曲輪群のうち、主曲輪は最も高所の第一の曲輪と考えられる。そして、一の曲輪と丘陵との間に山を削った林道の所に、丘陵続きを遮断する堀切があったと推測され、林道は堀切を利用したしたのではなかつたろうか。

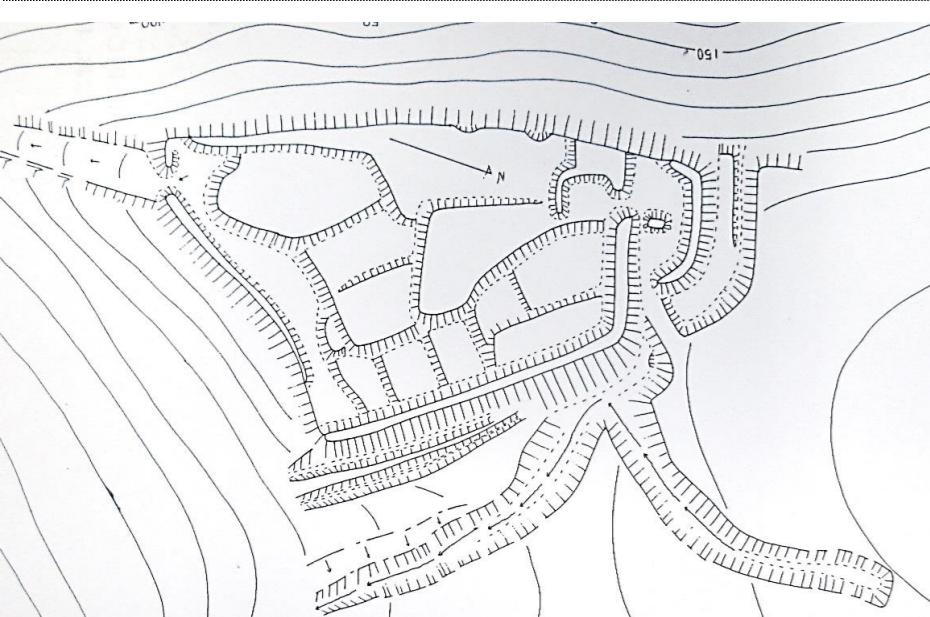
出 典 / 撮 影 年 月 日	山形県中世城館遺跡調査票（平成2年5月10日）	2019(令和1)年7月24日
-----------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（楯）跡　—中世の城館遺跡—

NO	21	名 称	安倍館	所在地	下本郷
----	----	-----	-----	-----	-----



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土塁・空堀）	良	個人有地	畠
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	やや良	無	不詳	無
遺物/所有(保持)者の有無	有（石器類）			加藤久右エ門（野口）

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	(記載無し)	室町時代	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城・詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	江戸時代
	主要居城者/軍事的機能	成沢兼義の6男満久が清水入部（1476年）後、清水11館の一つとして築城。1622年最上家滅亡とともに廃城になったと思われる。 歴代居城者は定かでないが、清水家7代城主大蔵大輔義親の家臣 角川与次郎の居館とされている。 内陸に勢力を伸ばしたい庄内武藤家との間に小競り合いは度々あったが、大きな戦いは永禄8年（1565）と天正10年（1582）である。 清水家滅亡の因となった7代城主義親と本家最上家親の戦いでも線上になつたと思われる。	内陸に勢力を伸ばしたい庄内武藤家との間に小競り合いは度々あったが、大きな戦いは永禄8年（1565）と天正10年（1582）である。 清水家滅亡の因となった7代城主義親と本家最上家親の戦いでも線上になつたと思われる。	満久の清水入部は、宗家最上氏の北進への拠点として、また、最上川舟運を一手に握り、内陸流通経済の統制を図ることであった。そのため、蔵岡・古口と清水を陸路で結ぶ拠点として重要な役割を果たしていたと思われる。	

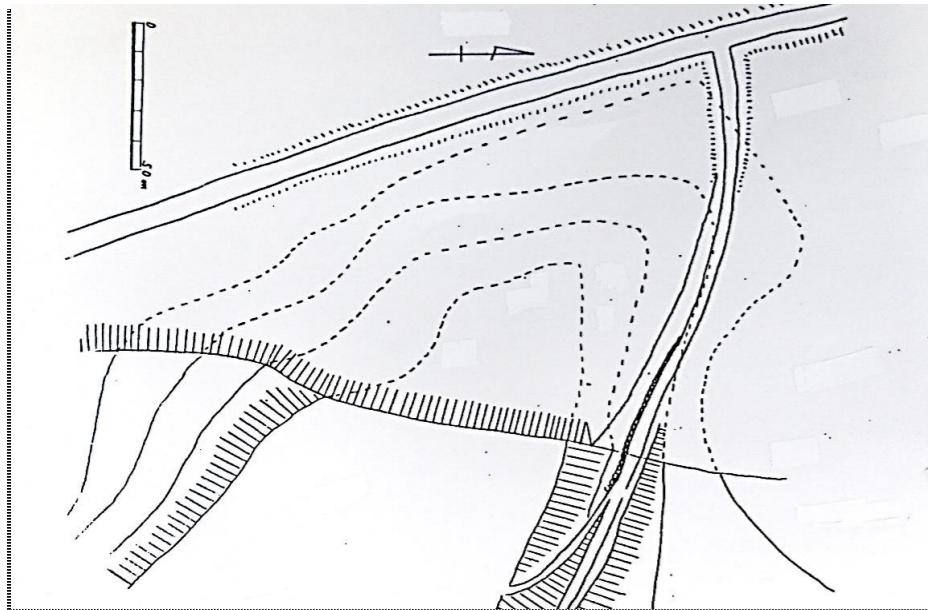
その他の文献等	本郷集落背後、東側丘陵の台地突端にある。蔵岡からの道路が本郷に下る手前、曲がり角から南に行く。かつては畠地であったが、今はほとんど荒地となっている。楯の名称は『最上郡史料叢書』と『地歴』では阿部楯跡とし、その当て字が本来と考えられる。 楯跡は台地突端に立地し、極めて防御性が強い。北と南に虎口を設け、平地続きの東側は土塁と二重横堀で遮断し、傾斜の緩い南側には土塁を置き、急傾斜となる西側の南にも削り残しの土塁を置く。北側の虎口は、馬出しの中に土塁を置き二つの空間を持つ外枠形とし、さらに内枠形虎口を置く連続虎口とする。極めて技巧的な虎口で、当地方で最も発達した特徴を持つ。 内部は切岸で13段に区画され、虎口近くの中央の曲輪が主曲輪的ではあるが、際立って防御された形跡はない。つまり、内部には守るべき防御が強調された中心の曲輪はなく、また、曲輪の整地は全体に甘くきちんと平坦にした形跡はない。 全体的に戦争を意識した臨時の特徴があり、虎口は最上系城館の最も発達した段階の技術と評価される。したがって、現在の遺構は土豪の構築したものと言えず、最上氏の上級権力者が関わって緊急時に造ったと考えられる。この楯の奥にはやはり鋭い多重堀切や堅堀、横堀に特徴を持つ防御性の高い嘉門楯跡があり同じ時期と見られ、このルートは山を越えると村山地方への最短の進攻路に当たるので、最新技術で造られたこれら二つの楯は、慶長5年（1600）、庄内上杉軍の進攻に備え構築されたと推測できる。おそらく、それらは在地の廃棄された楯を改造し、再利用したのであつたろう。
---------	--

（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成3年4月20日）	2019(令和1)年7月24日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	無	消滅	個人有地	砂取り場
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	(記載無し)	無	昭和40年頃全壊 (軽石ブロック工場總業)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無			

館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無し)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	館主は、樋渡源左衛門と伝えられるが、その他全く不明		本郷安倍館と同様、東沢方面の備えとして重要な地点と思われるが、今ではその規模すら定かでない。	

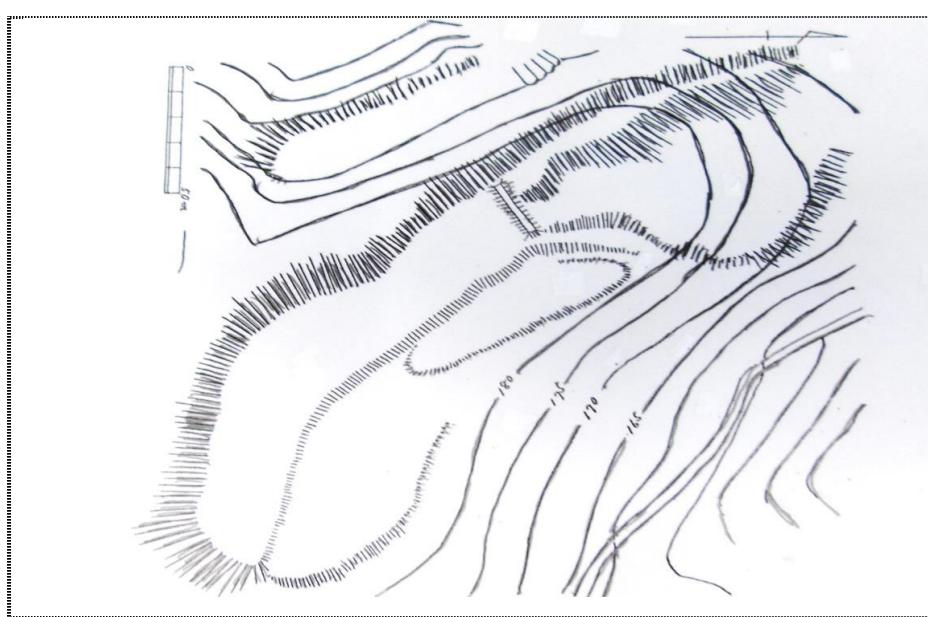
その他の文献等	上野と勝地の中間距離の丘陵地にあり、沢内川を本流とする二本の支流間に位置する。ブロック原料の砂利採取場となり、遺構はほとんど削りとられたが、当時の姿を示す一、二の堀が残る。 村人の話によると、以前は堀、段がはっきりと残っていたそうで、樋主 樋渡源左衛門は清水大蔵の家臣であったという。また、慶長19年（1614）清水氏滅亡の際に、落城したと伝えられている。なお、樋下に子孫と伝わる田中源左衛門家がある。		
（山形県最上地方の城と樋（平成28年5月）より）			

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（楯）跡　—中世の城館遺跡—

NO	23	名 称	タテの森館	所在地	畠ヶ
----	----	-----	-------	-----	----



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土塁）	消滅	(記載無し)	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良 (地すべり地帯で山全体が変化)	無	年代不詳 全壊 (度々の地すべり)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無			

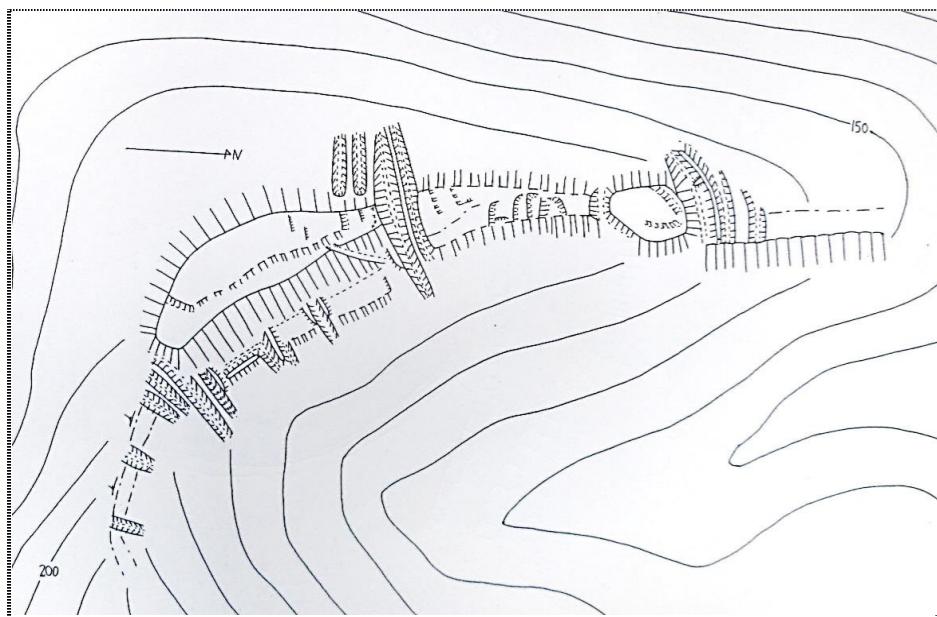
館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	不詳		南に嘉門館、東に安倍館を望み、連絡・中継点として重要な位置にある。	

その他の文献等	<p>楯（タテ）の森とは、畠集落よりも地続きである裏山一帯の総称であり、山全体が一つの楯となっている。山頂近くには空堀がその周囲を取り囲むように造られ、段と思われる。東西両側は沢に沿って挟まれ、後ろはなだらかな傾斜をしている。戦前までは採草地であったが、耕運機の普及により今日では墓地となっている。</p> <p>（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）</p> <p>この楯の南端からは、眺望が良く、当時の山道を隔て嘉門楯の楯主 角川与次郎の背化にあり、いわゆる見配的役割りをしていたのではないかと思われる。尚、村民の話によれば、戦いで敗れた残党が敵の追手から身を隠して見籠った場所であったという。（地歴 第10号）</p>
---------	---

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成3年5月8日）	2019(令和1)年7月24日
------------	------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（空堀）	やや良	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	やや良	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無	無		

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城・詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	この館は、この村の草分である早坂嘉門家の先祖が住んでいたところで、付近の百姓が秋の収穫を収めた所という。 早坂嘉門については、清水大蔵大輔分限帳に見当らないし、如何なる人物でどの様な役割を果していたのか定かでない。	軍事的には、隣接する「鷺の館」（長倉）、「楯森」（畠ヶ）が一望できることと庄内領に通じる道筋で重要な処と思われる。		

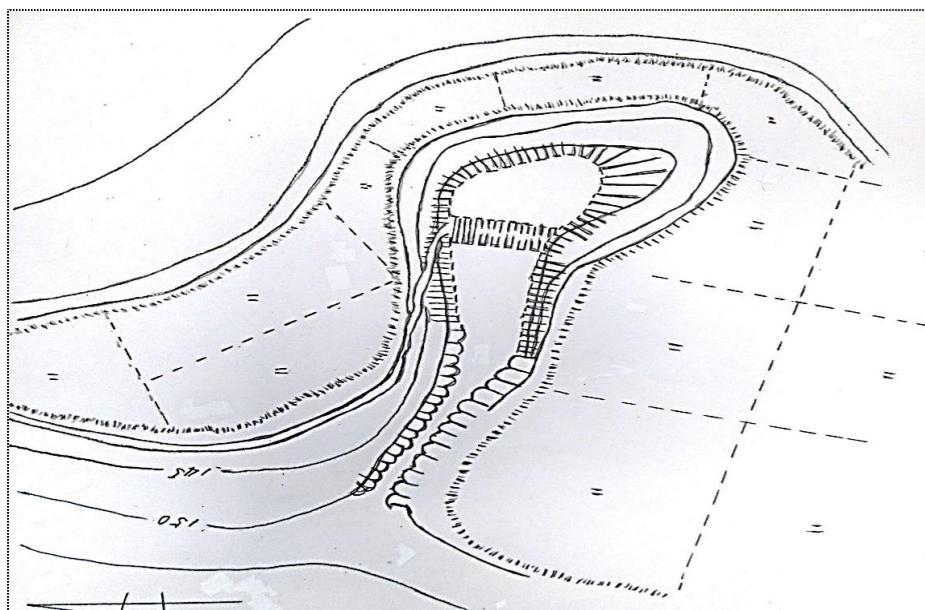
その他の文献等	比高は約80mで、角川流域の奥部、元屋敷集落背後の丘陵突端にある。丘陵は急峻で、特に西側は登攀不可能となる。楯跡の尾根上を南に行くと上台と呼ぶ広い大地となり、暫く行くと畠地に出会うことから、楯は南台地からの攻撃を特に想定したと考えられ、南尾根への備えが厳重である。この楯跡はかつて松岡進氏が紹介し、見事な堀切など見応えがあり、不便な奥地の急峻な楯跡ではあるが、訪れる人もいるらしく、集落奥の八幡神社からは楯跡への尾根上の小道があり、堀切がけには繩が用意されている。なお、楯跡は当地方で珍しいブナ林がある。 楯跡の最高所には内部に低い段をもつ曲輪があり、この単一の曲輪を守るべく厳重な遮断線を構築する。曲輪の規模は、東西最大約30m、南北最大約9mもの鋭い切岸を削り、下には横堀と堅堀、土塁を置き移動を妨げている。そして、南尾根は3条堀切とさらに尾根先を2つの堀切で遮断し、3条堀切は幅約18mと大きい。北側は2条堀切で遮断し、その先には仮小屋跡と思われる平坦地があり、さらに1条堀切を掘り、小曲輪の先を2条堀切と1条堀切で遮断する。少曲輪は楯下の道を見張る監視曲輪と推測される。 『山形県中世城館遺跡調査報告書』は、村の草分け早坂嘉門の先祖がいた楯とするが、多条堀切、堅堀、横堀など多様な堀に特徴があり、工事量も比較的多かったと想定され、仮小屋的な遺構も特徴である。おそらく最上氏上部の指示で最新の技術で構築した臨時の砦で、ここは庄内じやら村山に出るルートに当たることから、阿部（安倍）楯と同じく慶長5（1600）年、庄内上杉軍の進行に備えたと見られる。なお、楯の伝承からすると早坂嘉門の古楯を再整備した可能性がある。
	（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（楯）跡　—中世の城館遺跡—

NO	25	名 称	鷺の館	所在地	元屋敷長倉
----	----	-----	-----	-----	-------

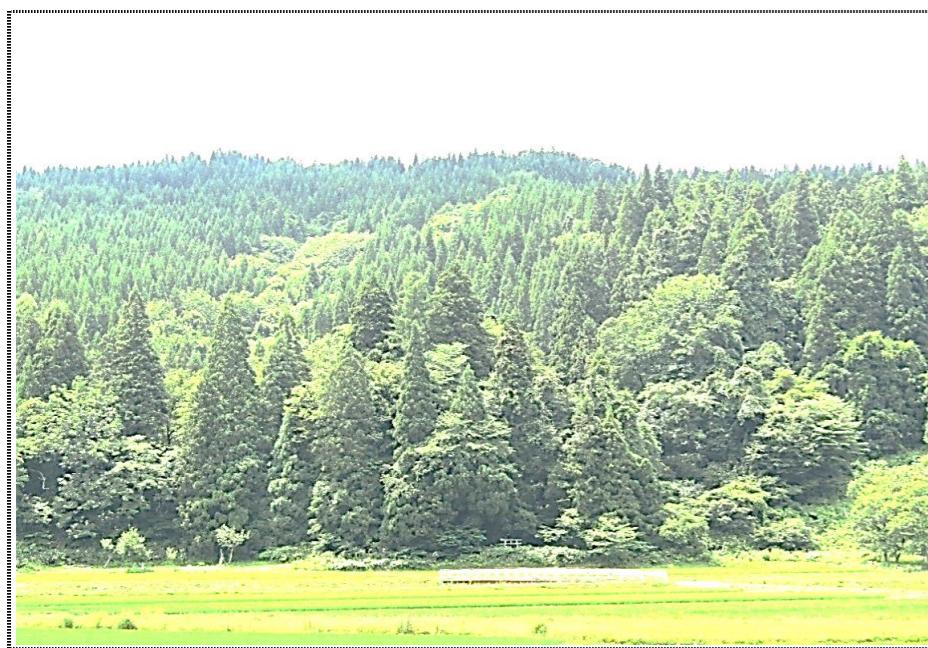


別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	(記載無し)	消滅	個人有地	(記載無し)
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	年代不詳 全壊 (原因不詳)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無			

館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無し)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	不詳		。	

その他の文献等	長倉の南方500m。長倉川がまわりを囲み、自然の水堀を形づくっている。実測は完成したが、聞き込みは何も得られなかった。 (「山形県最上地方の城と楯」並びに「地歴 第10号」)
---------	--

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成2年4月16日）	2019(令和1)年7月23日
------------	-------------------------	-----------------



別称 / 占地 / 種別 / 形状			
遺構/残有状況/所有者/現況			
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画			
遺物/所有(保持)者の有無			

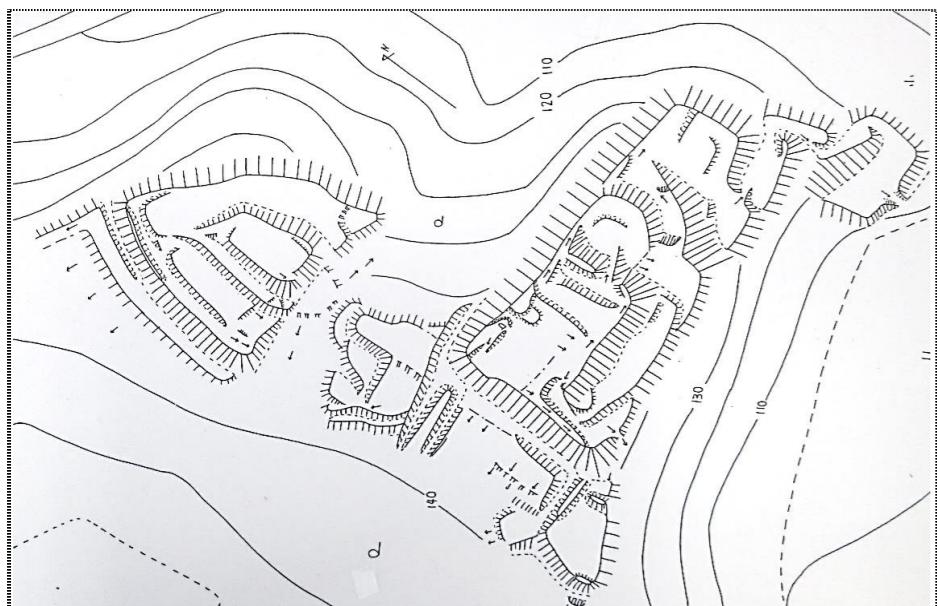
館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期		恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・記載無し	
	主要居城者/軍事的機能			

その他の文献等	<p>前九年の役の際、（安倍）貞任が陣を構えたという阿部楯に対して、（源）義家が陣取った楯と伝わる。南北両側は沢によって防備され、山頂付近には二つの大きな空堀といくつかの段によって堅固にされる。楯の北側には楯下（もと）と称する地名が残り、以前は村落があったという。</p> <p>（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）</p>
---------	--

出典 / 撮影年月日	2019(令和1)年7月24日
------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	源氏館・源治館	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（空堀）	やや良	国有地	（記載無し）
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	良	無	昭和40年頃 一部壊（開田事業）	無
遺物/所有（保持）者の有無	有（石器類）			加藤久右エ門（野口）

館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・（記載無し）	不詳
	主要居城者/軍事的機能	増訂最上郡史では、源摂津守を館主としている。 最上郡戸沢村史では、安倍貞任の館とし、源義家によって亡ぼされた前九年の戦いの跡とされている。 新庄領村鑑に「野口に楯有。源氏沢と言うところなり。其の楯中より米出るなり。焼しと見えて炭の如くなり」とある。	当時の鮭川は、松坂から神田に向け大きく迂回していたことから四方を山と川に囲まれた要害の地であった。 遠く最上川、岩清水、名高、中渡方面を一望できる要所である。		

そ の 他 文 献 等	比高は約90mで、楯（館）跡は、主曲輪のある南側部分と中心に略長方形曲輪をもつ北側部分とに分かれ。主曲輪は約33m×27mと小さく、整地はやや甘い。しかし、防御は厳重で、北側は削り残し土墨と鋭い切岸で守り、西側は鋭い切岸の下に空堀を掘り遮断し、北西先端は二条堅堀となつて斜面をくだる。そして、南側には切岸西端に舟形状の二つの虎口が開き、西にくだつた下には土墨造りの定型的な舟形虎口を備える。 主曲輪東側には、大きく三つに分かれる曲輪群があり、上部の二つの曲輪群への進入は上から横矢の櫓を折れる道を前身し虎口を突破しないとできない構造となる。沢を隔てた北側部分は、最高所の整地の甘い略長方形の中心曲輪の周りに東側にやや広い曲輪、西側に四段帶曲輪がとりまき、先端の曲輪二つには尾根を遮断する空堀を掘る。
	この楯は、厳重に防御された削平の甘い小さな主曲輪や鋭く導線を意識した曲輪群など、全体的に防御性に特化した構造をもち、領主が常駐する楯ではなく、臨時の防御用の楯であったと見られる。効果的な横矢掛りを考慮した導線構造、定型的な舟形虎口、二重の堅堀などの技術は、最上系城館の最後に発達したもので、在地の領主ではなくより上級者がかかわって構築したことを感じさせる。また、北側部分は全体に整地が甘く駐屯施設と考えられ、この楯が緊急時対応であったことを語る。 構築時期は庄内から与蔵峠を越えて羽根沢、小和田から神田そして山形方面に向かう要塞にあることから見て、慶長5（1600）年の出羽合戦時に庄内上杉軍に備えたと考えられる。さらに同年段階の上杉軍備えの城は、破却された古楯を改修することが多いと見られ、この楯も源治楯という古楯を全面改修したことが推測される。見下ろすようにどっしりとある楯丘陵の印象は、鮭川村の源氏楯と良く似ており、前身の楯は源氏楯同様に山形でも古い鉢巻式の楯ではなかつたろうか。

（出典：山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）

※比高・・・・・・盛土やガケなどの高さを近くの平らな所との差で表す

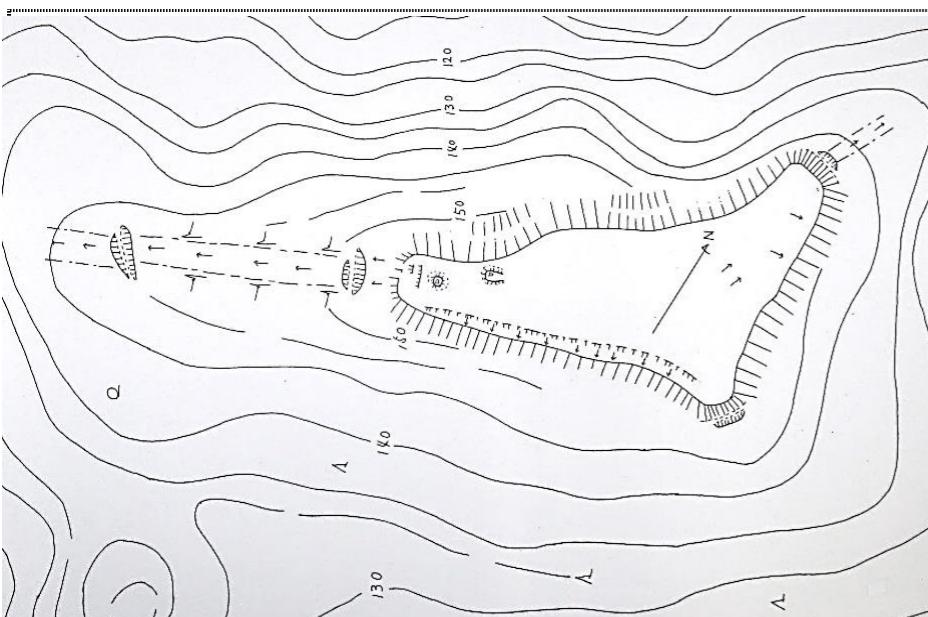
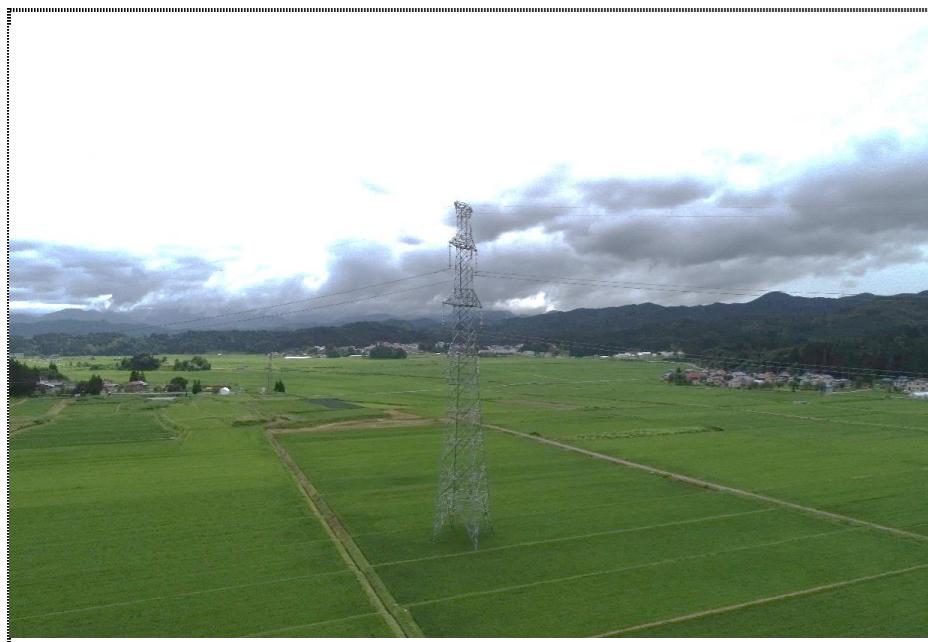
※曲輪（くるわ）・・・城の内外を土墨、石垣、堀で区画した区域の名称

※虎口（こぐち）・・・曲輪の出入り口

出 典 / 摂 影 年 月 日	山形県中世城館遺跡調査票（平成3年4月20日）	2019(令和1)年7月9日
-----------------	-------------------------	----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	館	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土塁・空堀・井戸）	不良	国有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無	無		

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	源氏館に対し名付けられたもので何等根拠はない。 安倍貞任一味の居た処と伝えられている。	不詳		

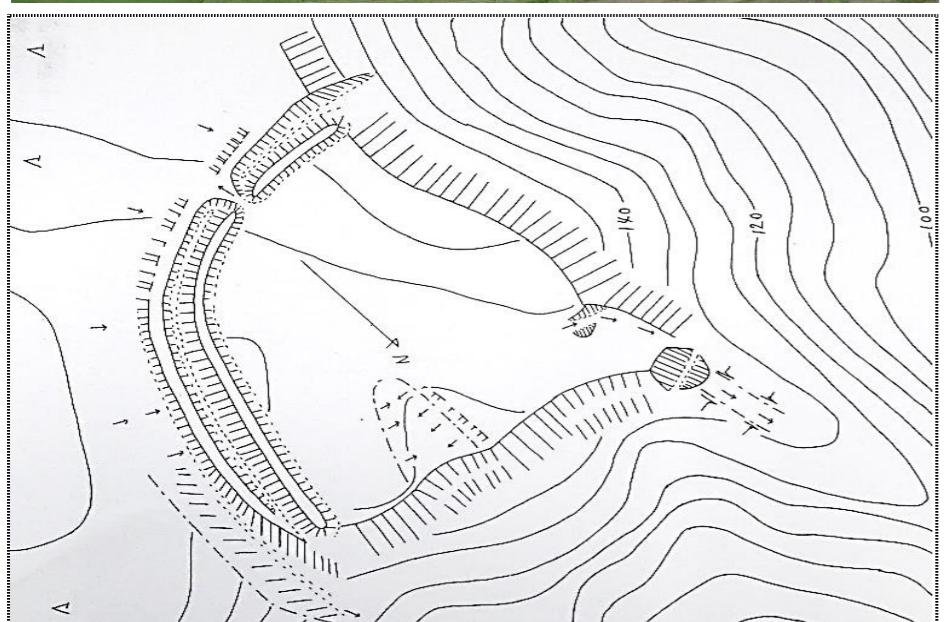
その他の文献等	<p>比高は約90mで、野呂田（上松坂）集落背後の丘陵山頂にあり、丘陵は八石山から鮭川に向かって南に伸びる突端に位置し、あたかも独立丘となっている。『最上郡史料叢書』に「チンド楯」、『戸沢村史（1988年）』には「チンドン楯」とある。平家楯は西方の源治楯に対する呼び名とされる。</p> <p>楯跡は広大な山頂にあり、三方の狭い尾根続きを小堀切で遮断した単純な構造である。急峻で登攀困難な東側と西侧斜面はそのままとし、南側切岸を削り防御としている。北側尾根にはさらに下方にもう一つ堀切を掘っている。内部は傾斜があり整地された形跡はなく、広さは南北約80m、東西最大約60mで、2015年9月調査時は、雑木林下にササ竹がブッシュ状に繁茂し困難であった。なお、緩やかな南斜面にはスギ林が植林されている。西側には2つの塚があって、1つは三吉大権現石碑、もう一つは今熊野神社・八幡神社石碑、大平山石碑その他に判読できない石碑が立ち、かつてここには神社もあったという。</p> <p>この楯跡についての地元の聞き取りで、『地歴』は地元では平家楯と呼ばず「楯野」と呼んでいること、年代、楯主について知っている人はいないことを書いている。</p> <p>村（集落）背後の丘陵上にあること、前には小丘陵があり奥には隠れたようになること、切岸と小規模な堀切だけで村人の工事量で可能のこと、さらには楯主や伝承のないことから、非常時の村人の「山あがりの場所」すなわち村の城と考えられる。そして江戸時代には、大平山三吉など信仰の山になったように思われる。</p> <p>（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）</p> <p>※切岸（きりぎし）・・・鎌倉時代～戦国時代に多くみられ、斜面を削って人工的に断崖とした構造で、斜面を通して敵の侵入を防ぐ。</p> <p>楯自体は、たいへん大きいもので、北側には旧戸沢村一帯で例のないほど大規模な空堀がある。（地歴 第10号）</p>
---------	--

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（楯）跡 ー中世の城館遺跡ー

NO	3	名 称	姥館	所在地	上松坂下天ヶ沢
----	---	-----	----	-----	---------



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	無	消滅	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不可	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無			無

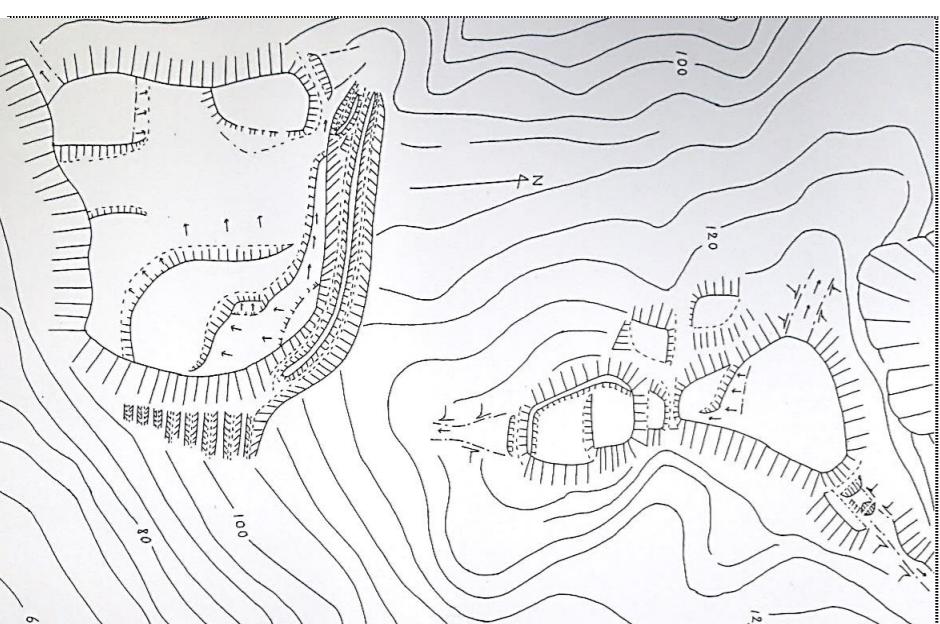
館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無し)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	安倍貞任乳母の居た処と伝えられている。		不詳	

その他の文献等	<p>比高は約80mで、野呂田（上松坂）集落背後の北東丘陵台地にあり、ぽんぼ館のちょうど東方正面に当たる。楯跡のある台地は、約80mの急峻斜面上の広大な平坦地で、全体にスギが植林されている。台地北西端の楯跡には、北側と西側斜面からの登攀は困難で、中堤脇から南斜面を歩き、比較的緩斜面の台地を登りスギ林を歩くのが良い。台地を300mほど行くと、スギ林の中に忽然と土壠と切岸面が出現し、その様子は鮭延城攻めの内町陣城跡とそっくりな印象である。</p> <p>楯跡は台地北西端に位置し、平地を下る北西尾根を堀切で遮断し、東と南の台地続きは沢状に入り込む地形を選び、土壠と堀切で遮断している。</p> <p>全体の規模は、南北約77m、東西約71mで内部にも窪地もあり、整地されず自然地形のままである。遮断線は土壠が現状で内部からの高さ1.5mで、外側は鋭く切岸を削り、深さ（現在）約1.5mとなる薬研堀空堀を掘り、厳重である。空堀外側には一部に外土壠状の高まりを持つ。北側と西側の斜面は急峻で登攀困難で、唯一の攻撃地点となる虎口は南側に作られ、狭い土橋の単純な形態にある。</p> <p>この楯跡は、形態から臨時の陣城と見られ、平地を見下ろす威圧的な台地を選定し、要害の地に厳重な遮断線を構築のうえ敵の進入を防ぎ、正にその当時、地域が戦時体制下にあったことを物語る。攻撃対象は神田地区にあった国人 岸氏の「大楯」と想定され、岸氏はさらに補強した奥の「本城楯」に本拠を移したのはこの時期ではなかったろうか。</p> <p>陣城の構築者は単純な虎口から見て、技巧的な虎口を持つ天正13（1585）年段階の内町陣城跡よりも古く、大宝寺氏と推測され、与蔵峠を越えて進入したのであろう。時期は大宝寺氏が最上地方に進攻し、小国細川氏を除き過半を従属させた永禄年間（1558～1570）が考えられる。</p> <p>陣城は、村（集落）の城と見られる平家楯跡のちょうど向かい側丘陵に当たり、庄内勢の進攻を受けて、村人は陣城隣山の村の城に避難したのであつたろうか。</p> <p>（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）</p>
---------	--

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成元年9月16日）	2019(令和1)年7月23日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下せたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土塁・空堀・道路）	不良	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	陶磁器			無

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	松坂三左衛門重令	室町時代	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城・詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無)</small>	室町時代
	主要居城者/軍事的機能	足利將軍義教との争いから逃れ、この地に館を築いた松坂三左衛門（文安5（1448）年卒）は、信州（長野県）の人と言われる。	後に最上氏の勢力がこの地に及んで清水氏大蔵入部となり、その配下 川口館の勢力に屈服することとなり没落した。したがって、廃館時期は清水氏の大蔵入部が文明8（1476）年であるから その後と思われる。	松坂三左衛門築館当時は、最上氏の清水分城前で佐々木氏の侵出前であることから、独立して松坂支配が出来たものと思われる。	

その他の文献等	<p>比高は約90mで、向松坂集落の南方、丘陵突端にあり、西方を鮭川が南下する。山麓には諏訪神社があり楯主の勧請と伝えられる。山頂と中腹に遺構があり、『地歴』の掲載図は中腹遺構の概要を表し、畝状空堀と書かれている。</p> <p>山頂遺構は二つの尾根上にあり、北尾根上のは単一曲輪で、整地は甘く北西尾根を二条堀切で遮断する。また、南尾根上のは最高所の曲輪が主曲輪で、東側は急峻な斜面を活かし西側を土塁で囲み、北側と南側は堀切で遮断し、厳重に防御している。この主曲輪は低い切岸で内部を二つの区画とし、三つの付属曲輪を持つ。</p> <p>中腹遺構は、大規模な薬研堀の二重空堀で尾根を遮断し、西側と南側は急斜面を活かし、東側には鋭い8mもの切岸下に8つの畝状空堀を掘る。内部は低い切岸で4つの区画を作り、北東は小高く尾根をそのまま残し中央部は低地となる。これら曲輪群のうちには、防御が特に強調された守るべき中心の曲輪は明確でない。この楯跡について『最上郡史料叢書』では、「山上まで馬道が通じ、歴然と石段の跡がある」と記されているが確認できなかった。</p> <p>山頂遺構と中腹遺構は異質である。山頂遺構は、主曲輪を当地方では珍しい土塁囲みで技巧的な特徴を持つが工事量はそれほど大きくはない見られ、村に基盤を置く土豪の構築と考えられる。これは高所にあり曲輪群は少なく、恒常に生活した楯ではなく非常用のもので、北の比較的大きい単一曲輪は、村人の避難曲輪ではなかったろうか。中腹遺構は、尾根を深く鋭く断ち切る二重堀切は圧巻で、緩い斜面を守る畝状空堀も特徴的である。そして、その内部には守るべき主曲輪はない。したがって、最上（さいじょう）の当時最新の技術であった横堀と畝状空堀を使用し工事量の大きいこの楯は、最上氏上級の指示で作った臨時の砦と見られ、慶長5年、庄内上杉軍の進攻に備えたと考えられる。</p> <p>最上義光は、上杉軍進攻に備え要衝に多数の楯を構築したが、多くは古楯を利用した形跡があり、諏訪楯跡はその好事例である。</p> <p style="text-align: right;">（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）</p> <p>※薬研堀（やっけんぼり）・・・堀形状の一つで断面がV字形</p>
---------	---

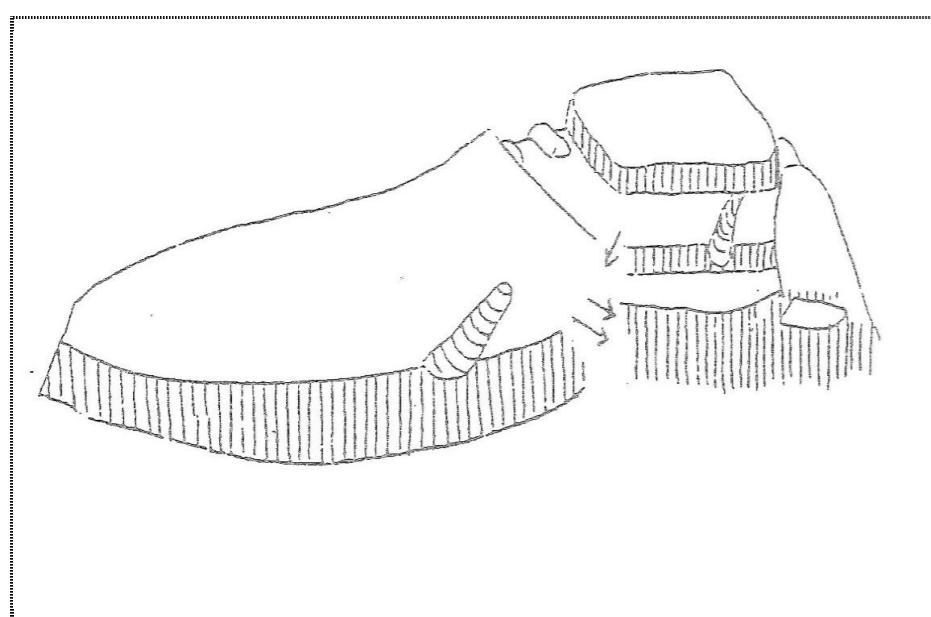
出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成元年10月1日）	2019(令和1)年7月23日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下せたんではなかろう



戸沢村の館（楯）跡 **—中世の城館遺跡—**

NO	5	名 称	里の館	所在地	下松坂本宮
----	---	-----	-----	-----	-------



別称 / 占地 / 種別 / 形状	サト館・佐藤館・臆病館	平地	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	無	消滅	個人有地	畠
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	昭和35年頃全壊 (開畠)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無			無

館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台	不詳
	主要居城者/軍事的機能	石器時代からの遺跡であるが、後に人が住むようになった。 清林寺過去帳に正徳3年（1713）里村小兵衛母林庭禪尼の戒名が見え、文政3年（1820）新蔵父なる仏以後、里村は見えない。 一説に、館主が合戦のとき一戦も交えずに館下の沼に隠れたとか逃げたとかで臆病館の名が付いたと言われている。また、攻めたのは佐々木氏（鮎延氏）ということで、この館には、笹が生えないとされている。	四方を田に囲まれた小丘陵で、領主支配としては良地と思う。	記載無	

その他の文献等	比高は約20mで、岩堰楯跡の東方に見える。水田中の大きな台地が楯跡で、松坂集落の西南方、田沢川左岸となる。『地歴』には最高所が幅18mの空堀で遮断されるとの報告があり。また、楯主が諏訪楯の松坂三左衛門と争い、後には左楯の岸 孫二郎によって滅ぼされたとの伝えを採録している。おそらく在地豪族が構築した城と思われる。
---------	--

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成元年10月8日）	2019(令和1)年7月18日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下せたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	サイカチ館	平地	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土塁）	消滅	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不可	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	無			無

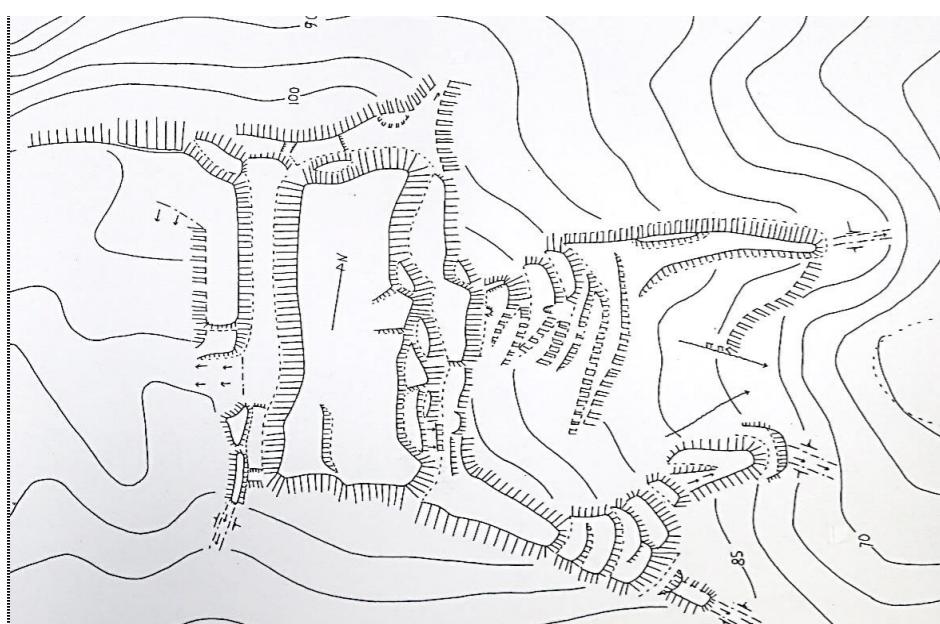
館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	館主は早坂左馬介で、対岸に左馬介の祈願所とする修験加性院があったと伝えられている。 左馬介については、全くわかっていない。			

その他の文献等	比高は約15mで、奥に雄大な源治楯の見えるぽんぼ館の手前、岩堰堤の東側台地突端に立地する。サイカチの大木のあったことから『最上郡史料叢書』『地歴』では俗称をサイカチ楯とする。『最上郡史料叢書』によると楯主は早坂左馬介と伝え、祈願所「照月山加性院」が堤の向かい側にあったという。また、楯下の小台地には源治楯の家来という加藤左馬介の「梨の木楯」があったが、水田となり消失した。 楯跡には近年まで台地を遮断する土塁と空堀があったが、平成27年（2015）10月調査では消失していた。平成16（2004）調査での略測によると、東西約19m、南北約73m規模で、土塁は高さ約1m、長さ約16m、空堀は幅約6m、深さ約1.5mあった。 この楯は、村に基盤を置く土豪の城と考えられる。
---------	---

(山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より)

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下せたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土墨・空堀）	不良	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	有（武器）			高山日出松

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	不詳		村史、最上郡史料叢書いざれも館の存在を記しているが、時期・人物・目的については記されていない。	

その他の文献等	<p>元神田小学校裏手、「大楯」楯跡西方の丘陵に国人領主の本城楯跡がある。</p> <p>最も高所に良く整地された主曲輪があり、南北約103m、東西の長いところで約39mと南北に長大な形をし、南西部が一段高く区画される。西側は高く鋭い切岸下に、幅約16mの大規模な空堀を掘り、西方尾根続きを遮断する。また、東側は東方に伸びる二つの尾根上に小さな曲輪を置き、このうち北側尾根上の先端曲輪は削り残し土墨で目隠しし、北側を鋭い切岸で遮断する。そして、南側尾根の東に伸びる曲輪群の先端は二つに分かれ、尾根続きを小堀切で遮断している。これら尾根上の曲輪群に守られた沢には削平地があり、2カ所から清水が湧いている。</p> <p>この楯は、大空堀で守る広大な主曲輪を 중심に、両側の尾根上の中曲輪群で守る沢には平坦地があって居住空間と見られ、大楯跡よりもシンプルな構造となる。この主曲輪には領主と重臣、曲輪群に守られた沢の平坦地には家臣団の屋敷地や村人の避難所があったと推測される。大楯よりも奥の丘陵にあり、主曲輪を守る大空堀や尾根曲輪で守られた曲輪群などの防御性は高いと思われることから、大楯によつた国人領主が戦乱の高まりを受けて、軍事性の高い恒常的な本城を構築したと推測される。構築時期は、庄内の大宝寺氏が激しく進攻した永禄年間ではなかろうか。この楯主は大楯同様に岸氏と想定される。</p> <p>本城という呼び名も興味深い。楯を使わずに本城としたのはなぜだろうか。城は領主の尊称に使われ、重臣だと「たて（楯）」の名称を使用したと考えれるが、岸氏は城の名を使えるほどのステータスの高い国人なのだろうか。</p> <p style="text-align: right;">（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）</p> <p>元神田小学校設立地及びグラウンドも楯の一部である。（中略）西側も明確でないが2～3の曲輪があり、すぐ次の山に続いている。北側は絶壁で、南側は他の楯には見られないような楯の内側に入り込んだ大変美しい曲輪が下まで続いている。頂上は卵型で、やや南側に傾斜している。（地歴 第10号）</p>
---------	--

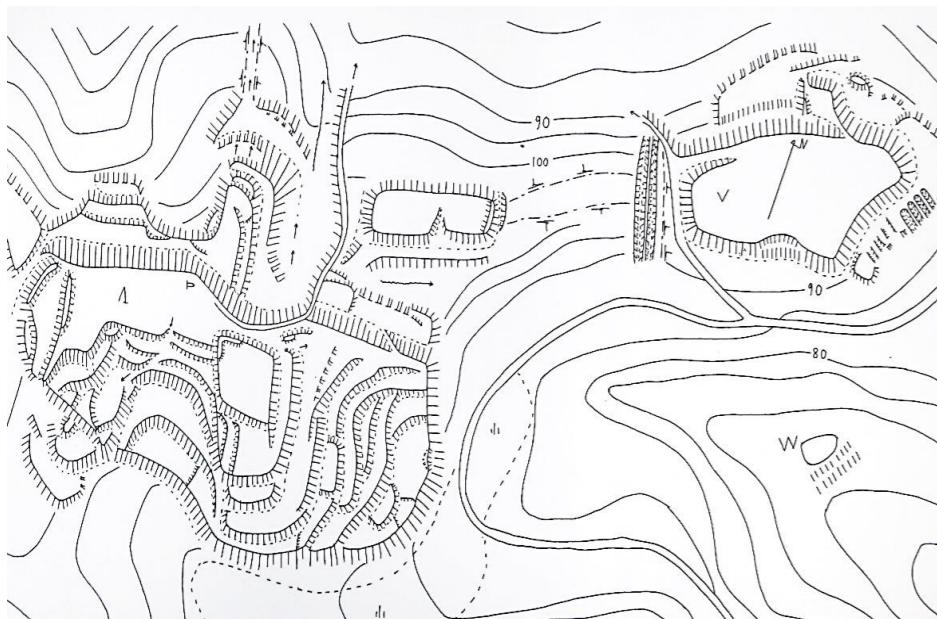
出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成元年9月23日）	2019(令和1)年7月23日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（楯）跡　—中世の城館遺跡—

NO	8	名 称	大館	所在地	神田楯山
----	---	-----	----	-----	------



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土塁・空堀）	やや良	個人有地	山林
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	やや良	無	一部壊 (ガケ崩れ)	無
遺物/所有(保持)者の有無	(記載無し)			(記載無し)

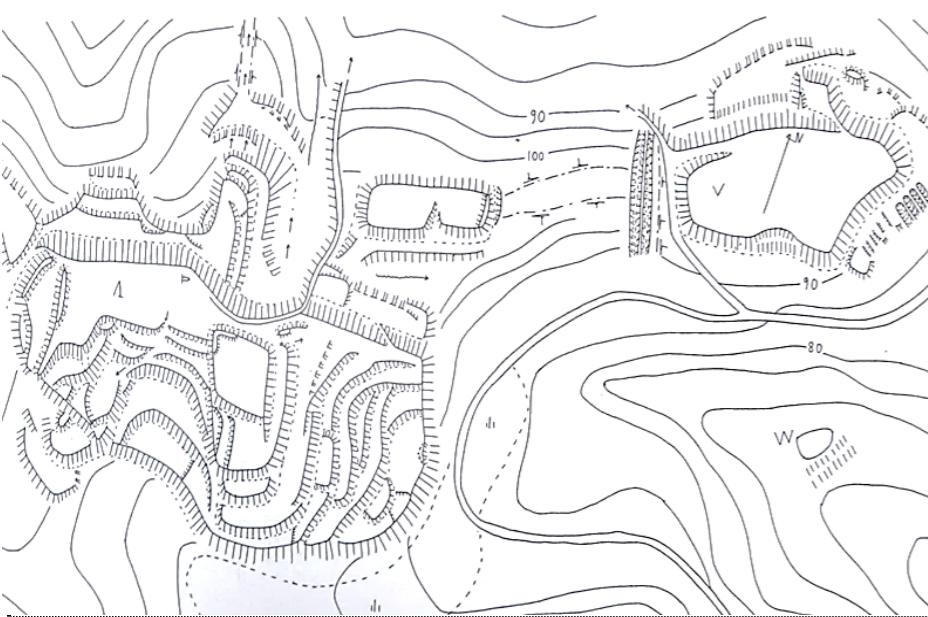
館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	大館某	戦国時代	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	館主は大館某と伝えられているが、時代・目的は不明。 館の規模は大きく、周囲階をなして郭が築かれている。 館の南南東の峰続きに左館があるが、大館との関係は定かでない。	野口、松坂、蔵岡を一望でき、当時、鮭川が眼下を流れていたことがあり、軍事的にも領主支配的にも大切な地と思われる。		

その他の文献等	<p>神田から名高の間の丘陵を楯山といい、西に大楯跡、東に岸氏の左楯跡、南に元あった梨の大木から呼ぶという梨の木楯跡がある。</p> <p>このうち、大楯跡は周囲に鋭い切岸を削り、西方尾根続きを堀切で遮断したなかに階段状に曲輪群を置く。その最高所の入り口に明治5年の三吉大神の石碑の建つ東西約54m、南北約15mの細長い曲輪がある。北側は鋭く高い切岸、東と南には多数の曲輪群、西には目隠し土塁の外にもう一つ曲輪を挟んだ外の目隠し土塁下には堀切で尾根を切断する。東側にはほぼ長方形の曲輪があり、この二つが楯の中枢となる主曲輪と見られる。主曲輪の南側から東側にかけては、南の沢となるところにやや大きな曲輪が造られ、その東には帯曲輪群が重なる。鋭い切岸の外、北側にも曲輪が置かれており、東端には虎口を持つ細長い曲輪があり、先端に目隠し土塁外と堀切で遮断する。</p> <p>大楯は、主曲輪と階段状曲輪群が特徴で、神田一帯を基盤とした国人クラスの恒常的な城と見られ、主曲輪には領主、多数の曲輪群には家臣が常在し、下部の広い曲輪は村人の避難場所と考えられる。楯主は佐々木氏に従い、秋田仙北から来た岸氏と伝えられる。</p> <p>(山形県最上地方の城と楯 (平成28年5月) より)</p> <p>楯主、その年代さえも全く不明である。しかし、小屋家文書清水大蔵太夫の家来分限帳によれば、神田楯主として、家老である安喰長門の名が見える。(地歴 第10号)</p>
---------	---

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票 (平成元年10月15日)	2019(令和1)年7月25日
------------	---------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	中腹	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪	不良	個人有地	山林（一部畠）
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	有（武器）			無

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	岸 玄番の祖	室町時代	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・記載無し	江戸時代
	主要居城者/軍事的機能	鮎延氏に従ってこの地に入り、戸沢氏入部まで居館。玄番の時代に帰農している。（最上郡戸沢村史）		サ館の本城は鮎延城 眼下に鮎川が流れ、舟運の要所であった。	西は杉沢、鹿の沢を通り庄内に通ずる間道、南に岩花、古口に通ずる道路があり、陸路の要所であり、松坂、向松坂、野口から米（ヨネ）方面が一望できる所で、領地支配の良地でもある。

その他の文献等	<p>左（サ）楯は、尾根を二条の長い堀切で遮断し、鋭い切岸を持つ大きな曲輪に舟形状虎口が開き、東切岸下には畝状空堀が守る。</p> <p>舟形状虎口と畝状空堀、二条の堀切に特徴を持ち、防御に特化しており、慶長5年（1600）出羽合戦の構築と見たが、戦国時代の構築か。</p> <p>（山形県最上地方の城と楯（平成28年5月）より）</p> <p>この楯も神田、名高間の丘陵地の一郭にあり、大楯の南隣に位置する。このことからこの左楯と大楯とはなんらかの関係があるものと思われる。楯主は佐々木氏の臣 岸孫二郎と伝える。岸氏は神田地域を総支配するためにおかれたものであろう。庄内武藤氏の最上攻めによる佐々木氏の真室（川）への後退、これにおいて岸氏は間接的に武藤氏の支配を受けたものと思われる。（此の時には楯主は岸孫三郎か？）その後、佐々木氏の丘陵と大沢郷の交換、これによって岸氏は真室（川）に移ったものと思われる。（地歴 第10号）</p>
---------	---

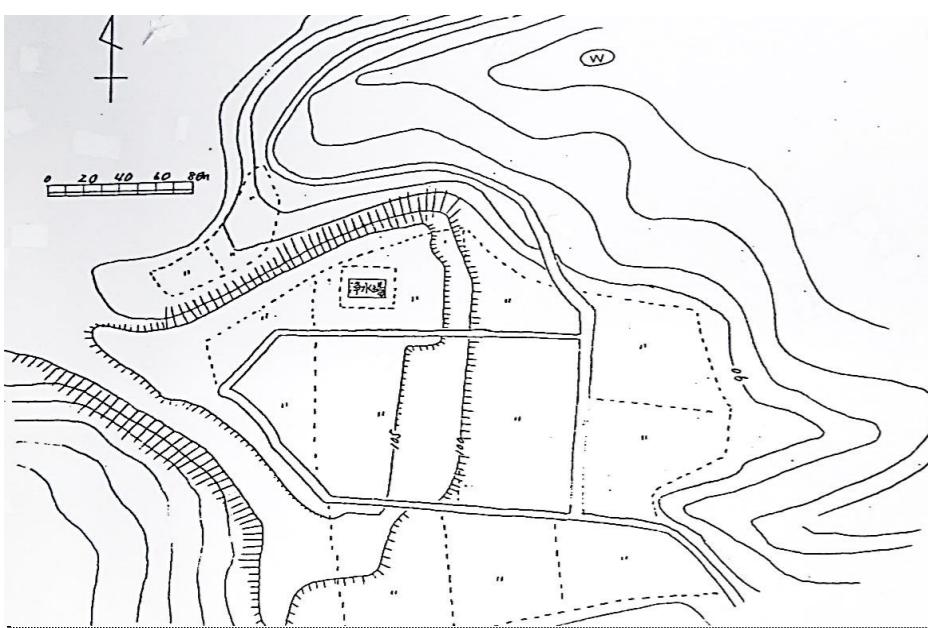
出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成3年4月17日）	2019(令和1)年7月25日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（櫛）跡 **—中世の城館遺跡—**

NO	10	名 称	梨の木館	所在地	名高上の山
----	----	-----	------	-----	-------



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	(記載無し)	消滅	個人有地	水田
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	(記載無し)	無
遺物/所有(保持)者の有無	(記載無し)	(記載無し)	(記載無し)	(記載無し)

館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無し)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	不詳	不詳	近くに大館、サ館があるが、それらとの関係は不明。 梨の木がったので「梨の木館」と呼ばれたと伝えられるのみで、その規模、目的については伝えられていない。	

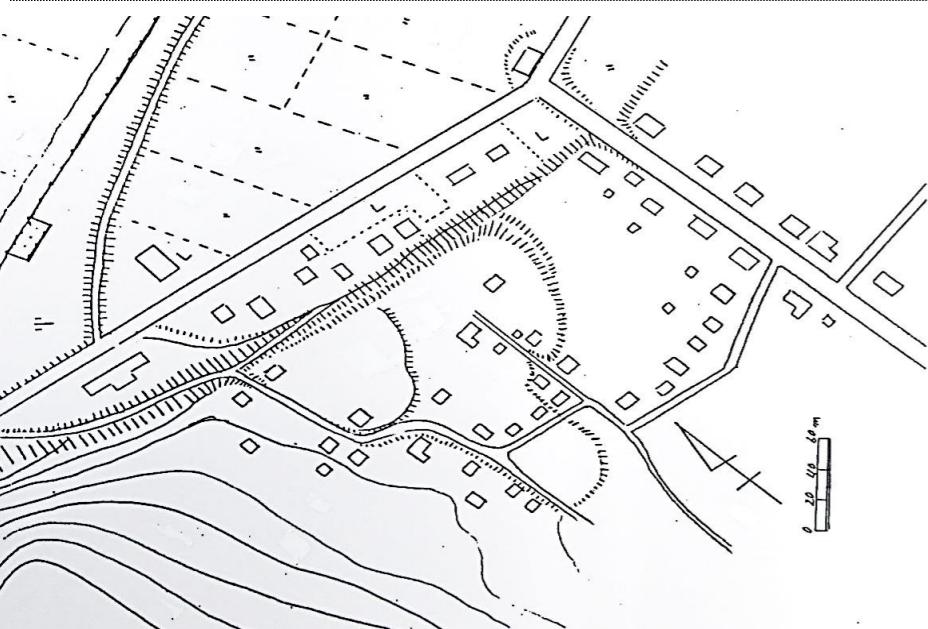
その他の文献等	サ館の南方八丁位のところにある。（戸沢村史）		
出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成4年4月21日）	2019(令和1)年7月25日	

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（櫛）跡　—中世の城館遺跡—

NO	11	名 称	彌次右衛門館	所在地	名 高
----	----	-----	--------	-----	-----



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	(記載無し)	(記載無し)	(記載無し)
遺構/残有状況/所有者/現況	(記載無し)	(記載無し)	個人有地	宅地
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	(記載無し)	(記載無し)	(記載無し)	(記載無し)
遺物/所有(保持)者の有無	(記載無し)			(記載無し)

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無し)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	不詳	不詳	名高村は、水の便が悪く田畠の開発は寛文2年（1662）である。。 お鷹屋の地名があり、タカ使いの場所と思われる。 (最上郡戸沢村史) 名高に館に関する資料はなく、その性格は定かでない。	名高村は、水の便が悪く田畠の開発は寛文2年（1662）である。。 お鷹屋の地名があり、タカ使いの場所と思われる。 (最上郡戸沢村史) 名高に館に関する資料はなく、その性格は定かでない。

その他の文献等	櫛山の続きで、名高集落の西裏に当たる丘陵上にある。 山上の平地に数本の空堀や土手が設けられ、いくつかの郭が区切られていたが、現在はほとんど破壊されてしまった。 (戸沢村史)		
---------	--	--	--

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成4年4月26日）	2019(令和1)年7月25日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（櫛）跡 **—中世の城館遺跡—**

NO	12	名 称	ヨスミ館	所在地	神田二ノ台
----	----	-----	------	-----	-------



別称 / 占地 / 種別 / 形状	様子見館	中腹	(記載無し)	(記載無し)
遺構/残有状況/所有者/現況	(記載無し)	消滅	個人有地	(記載無し)
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	(記載無し)	(記載無し)	(記載無し)
遺物/所有(保持)者の有無	(記載無し)			(記載無し)

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	不詳	不詳	最上郡戸沢村史によれば、神田村は濁沢川上流より開けたといい、二ノ台には集落があったとされるので、その時代の館主の館跡とも考えられる。	現在では、その遺構は全くなく、その規模なども不明である。

その他の文献等	高橋伝兵衛所有の落葉松林となっていて、ちょっと気がつかない。 昔、鹿ノ沢の人達が神田の方の様子を見るために設けられた物見のところであったろう。 (昭和12年8月 最上郡戸沢村史)
---------	---

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成4年4月26日）	2019(令和1)年7月18日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下せたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	岩鼻館・穴館	平地	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（土塁・空堀）	不良	個人有地	畠・宅地
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	昭和50年頃 半壊（宅地造成・開	無
遺物/所有（保持）者の有無	無			

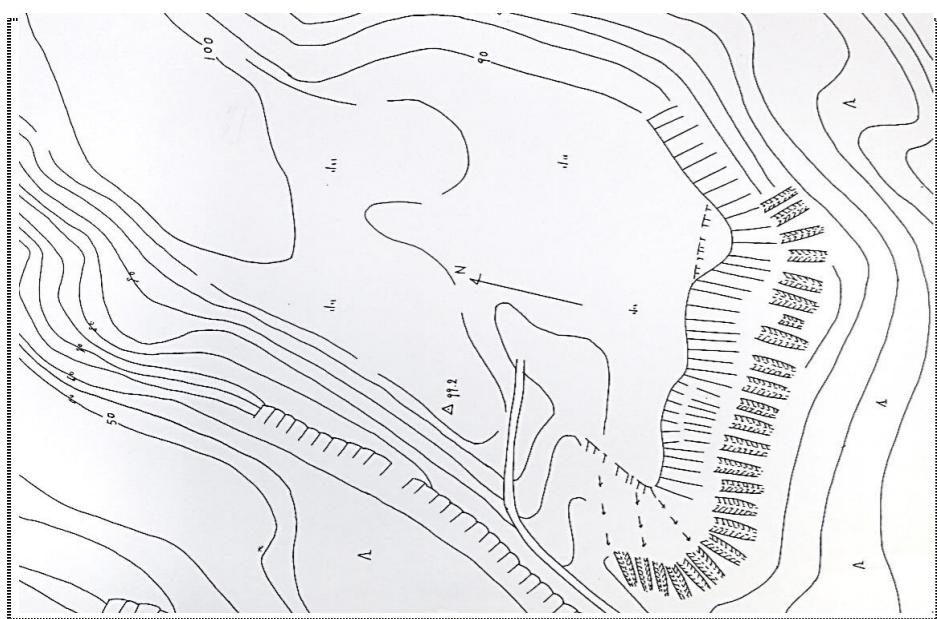
館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	佐々木典膳	室町時代	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・記載無	江戸時代
	主要居城者/軍事的機能	一時、庄内武藤氏の手に渡るが、後に再び所領することになり、家臣 井上将監を配す。 永禄8年（1550）清水城が庄内勢の攻撃（鳥打場合戦）を受けるが、その前後の戦いで敗れた鮭延氏は大沢領と領地交換となり、真室川に移ることになる。後に再び所領となり、井上将監を配すことになるが、最上氏滅亡と共に廃城となる。		当地は最上川と鮭川の合流点で、交通・軍事両面から重要な地点である。	

その他の文献等	<p>鮭川が大きく蛇行し、最上川に合流する地点西側、岩花集落北方の段丘上に立地する。この辺りは正に古代以来の最上川舟運の要地で、古代には東山道水駅「佐芸（サエ）駅」のあったところだった。佐芸駅比定地については、本楯跡のすぐ南西、最上川すぐ上にある出舟遺跡から古代の土師器、須恵器などが採集され、関係遺跡と推測されている。なお、中世には鮭川は岩花近くを流れ、川に向かって出っ張っている地形から「猪の鼻」と呼ばれ、さらに岩花になったという。</p> <p>楯跡は、台地東側に長さ約34m、幅約11m、高さ約3mの大規模な土塁があり、外側に幅約10mの空堀の痕跡が残る。台地西側の土塁・空堀は消失したが、縁辺には空堀の痕跡が確認でき、台地突端を大規模な土塁と空堀で切断し、ぬ位置側を楯としたことが推測される。</p> <p>昭和55年（1980）の調査報告で「約200m四方の大規模な城館跡であったが、近年、開田により大部分が消失した。」としたが、鮭延氏入部の楯という歴史的に重要な楯にも関わらず、開田により無残に土塁半分が削られ、空堀が埋められていたこともあって、なによりも地域の方々に楯跡について理解してもらう必要性を痛感した。</p> <p>岩鼻楯跡について『新庄古老覚書』は、「佐々木典膳（鮭延越前）初に居候処の由、夫れより眞室に所替、此岩鼻の館に大いなる穴有り故に古此館を穴館の城と申せしと也」との伝承を載せている。</p> <p>これについて『最上郡史料叢書』は、岩花近辺に鮭延氏と関係の深い長林寺、佐々木明神、三蔵院屋敷のあるところを見ると事実と思われる、とし、時期は永禄年間の庄内合戦前で戦いに敗れ、京塚以南と大沢郷を交換し、眞室（鮭延）城に入ったのではなかろうか、とする。</p> <p>その後、鮭延氏は最上義光に臣従した後に岩鼻を回復し、家臣の井上将監を置いたとされる。鮭延氏が岩鼻に最初、拠点を置いたことは史実と見られ、その狙いは古代駅家以来の最上川舟運の要衝確保であつたろう。</p> <p>（山形県最上地方の城と楯 平成28年5月より）</p>
---------	--

出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成元年10月21日）	2019(令和1)年7月23日
------------	--------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下せたんではなかろう





別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	山頂	館	(記載無し)
遺構/残有状況/所有者/現況	曲輪（空堀・枡形・井戸）	不良	(記載無し)	畠
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	不良	無	昭和40年頃 半壊（開畠事業）	無
遺物/所有（保持）者の有無	有（茶臼）			不詳

館歴概要と機能	築館者/年代/館性格/廃館時期	ドーアン能登守	室町時代	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>記載無し</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	地元の人は、館主を能登守としているが、如何なる人か定かでない。 開畠前は、山上の平坦部に館主の屋敷跡と思われる20m四方の土居で囲まれた処もあった。 山上には、右に八向館・升形館、峰伝いに川口館に通じた道がある。		館の眼下に鮭川、最上川が流れ、清水・古口・岩花・野口と遠望でき、軍事的に見ても良地であるが、能登守について全く不明であり、その目的や機能は定かでない。	

その他の文献等	金打坊集落背後の丘陵上にあり金打坊楯跡ともいわれるが、楯跡部分は新庄市となる。 楯跡は、最上川に鮭川が合流する地点の東方にあり、両側は川に落ちる急崖となる。台地上の遺構は、畠地開発によりほぼ消失しているが、平成16年（2004）調査では斜面のスギ林の中に見事な畠状空堀を確認している。なお、楯に上がる登り口に殿様の井戸という清水があり、井戸の底には黄金の簪（かんざし）が埋まっているとの伝承がある。 消失した台地上の遺構について、『最上郡史料叢書』では「方十五・六間の土居に囲まれ」とし、『地歴』では「河方を除く三方は土壁によって囲まれ、正面の土塁は門であったらしく一部破損している」と書き、虎口の開くдорりがあったことが分かる。内部からは『戸沢村史』で小型の板碑か碑伝と石臼が出土したと言い、『地歴』では瀬戸片、短刀が発見されたと記す。また、戦後直後の調査では、最も奥の南北約100m、東西約50mの平坦地の中に、方35mくらいの土居で囲まれた館主の邸宅と思われるところがあるとされている。そして、ここは難航不落の地であるが、尾根続きの矢向山方面からの攻撃には弱いとし、庄内の悪屋形武藤（大宝寺）義氏が侵入した際には、この楯も落城し銃器、宝物を悉く井戸に投げて逃亡した、との伝承も紹介している。 この楯跡に現在残る畠状空堀は、切岸下に緩やかな西斜面を守り、24条が確認でき、大きさは幅約4~6m、長さ11~16m、深さ1~1.5mであるが、この空堀について嶺金太郎は「二段目の平にドーアンがキツケというあり、キツケは幅の広い畠の義で館時代の遺物である。」と書いている。 楯の位置は正に最上川舟運の要衝場所にあり、楯主ドーアン能登守は川の領主であったに違いない。
---------	--

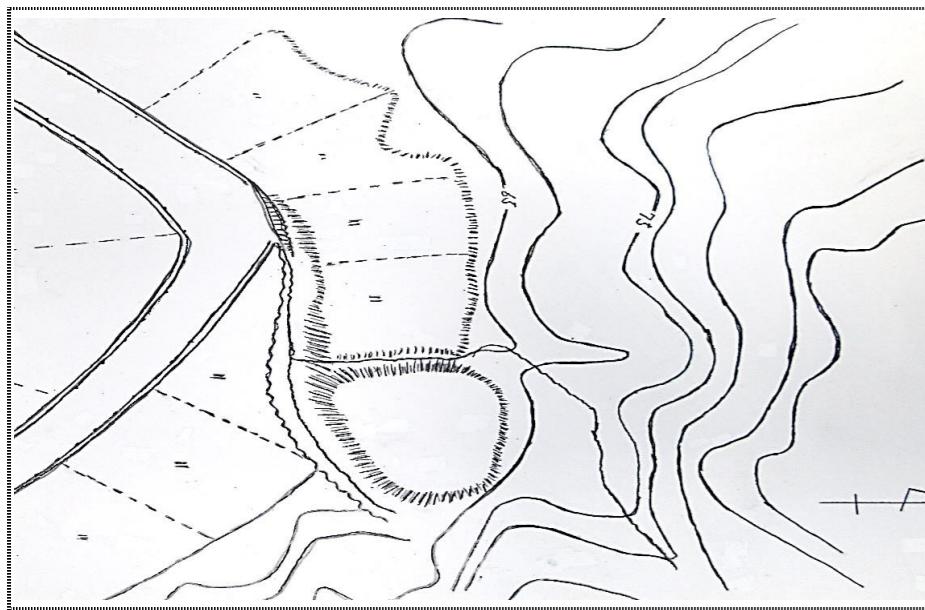
出典 / 撮影年月日	山形県中世城館遺跡調査票（平成元年9月10日）	2019(令和1)年7月24日
------------	-------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



戸沢村の館（楯）跡　—中世の城館遺跡—

NO	26	名 称	御殿野	所在地	神 田
----	----	-----	-----	-----	-----



別称 / 占地 / 種別 / 形状	(記載無し)	台地	館	単
遺構/残有状況/所有者/現況	(記載無し)	消滅	個人有地	水田
管理状況/史跡地指定/破壊の場合/開発計画	(記載無し)	無	不 詳	無
遺物/所有(保持)者の有無	(記載無し)			

館 歴 概 要 と 機 能	築館者/年代/館性格/廃館時期	不詳	不詳	恒久的城館・臨時の城砦・本城・支城・出城 詰め城・里の城・居館・烽火台・ <small>(記載無し)</small>	不詳
	主要居城者/軍事的機能	不 詳	不 詳	不 詳	不 詳

その 他 文 献 等	「戸沢村史」「最上郡戸沢村史」及び「山形県最上地方の城と楯」とも記載無し		
------------	--------------------------------------	--	--

出 典 / 摂 影 年 月 日	山形県中世城館遺跡調査票（平成3年4月2日）	2019(令和1)年7月23日
-----------------	------------------------	-----------------

「多分、(工作物を除外して)こういう感じで見下ろせたんではなかろう



館（楯）跡 分布図

山形県取上郡

の1地形図を複製したものである。(承認番号) 噶57 東復 第34号

